日本基督教団 高井戸教会

礼拝のしおり（2022 年 9 月号）

～主の御前に一つにされて～

すると、“霊”がフィリポに、「追いかけて、あの馬車と一緒に行け」と言った。フィリポが走り寄ると、預言者イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、「読んでいることがお分かりになりますか」と言った。宦官は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と言い、馬車に乗ってそばに座るように頼んだ。

（使徒言行録 8 章 29～31 節）

牧師館の庭に遊びに来たアゲハ蝶（ナミアゲハ）。園庭におけるビオトープ作りがなされ、蝶やトンボを目にする機会が増えました。

主の聖名を讃美します。9 月となり、日中はなお暑いものの、朝晩には秋の気配を感じます。

新型コロナウイルスによる影響下に置かれて 2 年半が過ぎ、なおその状況が続いています。しかし、高井戸教会でも、主の日の礼拝を 2 回に分けて捧げることは続けながら、長い間中止していた求道者会を新たな形で再開したり、子どもの教会の幼小科の分級や父母分級が 9 月から再開するなど、今年度に入ってから少しずつ新たな動きが生まれています。

一昨年、新型コロナウイルスによって生じた厳しい状況の中で、主日の礼拝以外の諸集会はすべて中止する等の措置を講じることとなりました。その頃に漠然と思い描いていたことがあります。それは、やがて状況が少しずつ改善し、礼拝以外の集会を行えるようになった暁には、礼拝の前後に聖書輪読会を行ってはどうかということでした。その考えは現在のところ実現には至っていませんが、新たな思いをもって皆で聖書を開き、生きておられる神さまの言葉を、神さまからの語りかけを新しく聴く者とされたい。私自身の中にそのような願いがあってのことでした。

しかし、私が抱いていた思いと、ある意味で共通する思いを持った牧師たちがおりました。有志の牧師たちがオンラインでの「黙想の会」という集まりを企画し、実行に移してくださって、私も参加させていただいています。聖書の御言葉を生きた語りかけとして聴くこと、一人で聴き、また他の人と共に聴くこと、その中で知る御言葉の豊かさに、驚きの思いを抱かされています。聖書は、自分一人でも読み、その御言葉に触れるべきものです。しかし、自分だけでなく、他の人たちと共に御言葉に触れ、心を傾けて聴く時に、どれほど豊かな神さまからの語りかけに触れさせていただけるか、そのことを新たに知る経験を与えられています。

8 月のある日、車を運転していて、カーラジオを付けました。何かのラジオ番組がまだ始まったばかりのようで、「目の前にある作品について語ってみてください」という男の人の声が聞こえてきました。すると、それに答えるようにして話し出したのは、お笑い芸人で芥川賞作家の又吉直樹さんでした。そして、その会話は、写真の展覧会で交わされているらしいことも分かってきました。やがて耳を傾けていて驚かされました。「目の前にある作品について語ってみてください」と最初に話した人は、「全盲」の方だと分かったからです。帰ってからインターネットで調べてみたところ、全盲の美術鑑賞者・写真家である白鳥建二さんという方でした。

白鳥さんは、目の前にある作品を直接、肉眼で見ることはできません。しかし、一緒に見る人からその作品がどのような作品であるか、その人が語ることを通して白鳥さんは「見る」のです。他の人が作品を見て、言葉を語る。その言葉によって白鳥さんが心のうちに見る作品は、どのような作品となるのだろうか、と思わされました。興味深かったのは、何とか白鳥さんに分かってもらうために、目の前の作品について細部に至るまでよく見て、またその作品から与えられる印象をも語ろうとする中で、又吉直樹さんが口にしたことでした。「何だか、自分ももっとよく見るようになるから不思議ですね」。見えていても見ていないものを、見るようになる。全盲の白鳥さんと一緒に「見る」中で初めて見えてくるものがある。

今この時、聖書を開いて、神さまが語りかけていてくださる御言葉を聴き取りたい。一緒に聴く中で、見えていなかったものを見させていただきたい。その願いを新たにさせられています。

高井戸教会牧師　七條真明

日本基督教団 高井戸教会

◎9 月 18 日～10 月 9 日の主日礼拝の予定

礼拝の予定	聖書・説教題	交読文	讃美歌 21
9 月 18 日（日）	詩編 37 編 1～6 節 コロサイの信徒への手紙 3 章 5～11 節 「古い人を脱ぎ捨て、新しい人を身に着けて」	詩編 51 編	17, 441, 436, 28
9 月 25 日（日）	出エジプト記 34 章 4～9 節 コロサイの信徒への手紙 3 章 12～17 節 「キリストの言葉が豊かに宿るように」	詩編 119 編 169～176 節	7, 57, 472, 29
10 月 2 日（日）	申命記 7 章 6～8 節 コロサイの信徒への手紙 3 章 18 節～4 章 1 節 「主キリストに仕える者として」	詩編 34 編	1, 437, 81, 26
10 月 9 日（日）	レビ記 2 章 13 節 コロサイの信徒への手紙 4 章 2～6 節 「祈りつつ語る言葉を」	詩編 32 編	11, 495, 521, 27

☆9 月 18 日～10 月 9 日の主日礼拝、その他について（お読みください）

新型コロナウイルスの感染防止を考慮して、9 月 18 日以降の高井戸教会の主日礼拝等について、以下にご案内いたします。ただし、感染状況が変わり次第、以下と違う対応になる可能性もあります。その点をご了承ください。なお、変更する場合は、高井戸教会の週報やホームページでお伝えするようにいたします。

◎主日礼拝について

主日の礼拝については、毎週日曜日、第一礼拝(午前 9 時 30 分開始)と第二礼拝(午前 11 時開始)という 2 回の礼拝を行う形を継続しています。どうぞ、どなたでも第一礼拝または第二礼拝にご出席ください。ただ、感染に不安のある方、体調の優れない方は無理をなさらず、ご自宅で礼拝をお捧げください。

毎月第 1 日曜日の第一礼拝ならびに第二礼拝において、聖餐式を行います(安全を期して、市販の聖餐用の個包装のウエハースとぶどう液を用います)。

毎主日の第二礼拝のライブ配信（礼拝の生中継）も続けて行っていますので、ご自宅において動画を視聴しながら礼拝を捧げることができます。ライブ配信を視聴したい方は、高井戸教会までご連絡ください（TEL 03-3333-2465）。

また、礼拝説教の動画のアップロード、『礼拝のしおり』の発行も続けています。どうぞご利用ください。

なお、主日礼拝については、感染の状況を見ながら 9 月以降いずれかの時点で、1 回の礼拝にすることも検討しています。

◎子どもの教会について

幼小科は、毎日曜日午前 8 時 30 分より高井戸教会の礼拝堂で礼拝を捧げています。また、9 月より、幼小科の子どもたちの分級ならびに父母分級も再開することとなりました。幼小科の分級は礼拝後、高井戸教会 1 階大集会室において、父母分級は 1 階小会室において行います。

中高科は、毎日曜日午前 9 時 30 分より高井戸教会 2 階会議室において行っています。

◎オンライン祈祷会について

Zoom というアプリを用いてのオンライン祈祷会を、毎月 1 回（第 1 日曜日の午後 5 時より）行っています。

今現在、礼拝のライブ配信ならびに説教動画のメールを毎週受け取っておられる方は、開催日の前日までに案内のメールをお送りしますが、それ以外の方で参加を希望される方は、七條牧師までご連絡ください。また、「オンライン祈祷会」と称していますが、高井戸教会にいらしての参加も可能です。互いに距離を保ち、換気をした部屋で、マスクを着けた形で参加していただきます。準備の関係上、教会にいらっしゃる方は事前に七條牧師までご連絡ください。

◎求道者会について

原則として毎月第 4 日曜日の第二礼拝後、12 時 20 分～40 分（約 20 分間）、礼拝堂において行っています。神代真砂実著『改めて学ぶ、教団信仰告白』（東神大パンフレット）をテキストに用いての学びです。どうぞどなたでもご出席ください。

日本基督教団 高井戸教会

8月の礼拝説教から（＊8月21日の礼拝説教の要約）

「キリストの内に隠れている宝」（コロサイの信徒への手紙2章1～5節）

牧師 七條真明

洗礼を受けて、キリスト者として歩み出す。洗礼を受けるということは、主イエス・キリストが御自身の十字架の死とご復活において成し遂げてくださった、私たち人間に差し出されているその救いを、自分のためのものとして受け取ること、その救いに与らせていただくということです。洗礼を受ける者にとっては、人生においてただ一度限りの、決定的な救いに与るということです。そういう意味では、洗礼は、一つの辿り着くべきゴールに着いたと言ってよいほど決定的なことです。しかし、それと同時に、まさにここから始まるのだということ、私たちは、洗礼を受けてキリスト者とされて、主イエス・キリストを信じる者として歩み出す、そのスタート地点に立つことでもあります。

コロサイの信徒への手紙は、小アジアと呼ばれた地域のコロサイという町に生まれた教会に宛てて、使徒パウロが書き送った手紙です。コロサイ教会は、パウロの同労者であったエパフラスという人が行った伝道によって生まれた教会でした。パウロは、まだコロサイ教会の人たちと会ったことはない。そのような中で書き送ったこの手紙に、パウロは、自らの思いを込めるようにしてこう記しました。「わたしが、あなたがたとラオディキアにいる人々のために、また、わたしとまだ直接顔を合わせたことのないすべての人のために、どれほど労苦して闘っているか、分かってほしい」（1節）。そして、パウロが、コロサイ教会の人たちに「分かってほしい」と記す、自らの労苦と闘いについて、続けてこう語ります。「それは、この人々が心を励まされ、愛によって結び合わされ、理解力を豊かに与えられ、神の秘められた計画であるキリストを悟るようになるためです」（2節）。

「神の秘められた計画であるキリストを悟るようになるため」。「秘められた計画」と訳されているギリシャ語の言葉は「ミュステーリオン」という言葉です。英語の「ミステリー」という言葉の語源にもなっている言葉です。「神秘」「奥義」「なぞ」「不可解なこと」、そのような意味の言葉だと言えます。神のミステリーであるキリスト。神の秘儀、神の奥義であるキリストを悟るようになる。多くの人々において、そのことが起こるように。パウロは、自分がそのために祈りながら労苦し闘っているのだ、と語るのです。

私たちにおいて、誰の目にも明らかとは言えないもの。神のミステリー、神の秘儀としか言えないイエス・キリストという御方のうちに、どれほど豊かなものを見出すことができるか。それは、「知恵と知識の宝はすべて、キリストの内に隠れています」（3節）、そう語り切ることができるほどだ、とパウロは言うのです。パウロが、コロサイ教会の人たちに向けて、力を込めてそのように語るのは、なぜであるのか。その理由は、4節に見出すことができます。「わたしがこう言うのは、あなたがたが巧みな議論にだまされないようにするためです」。

パウロは、コロサイの町に伝道がなされて、イエス・キリストを信じる人々が生まれ、教会が誕生したことを大いに喜んでいました。しかし、一方で、パウロが耳にしていたことがあったのでしょう。コロサイ教会の人々の近くに、このように語りかける人々がいたようなのです。キリストを通して、ある知恵と知識を得ることができることは否定はしない。しかし、そこで得ることができるのは、知恵と知識のほんの一握りのことだけだ、と。あるいは、こういう考えも、コロサイ教会の人々の身近にあったらしい。神のことを知ること、神の領域というものは、私たちの遠くにあるのだから、さまざまな修行や修練をしてこそ、そこに初めて近づくことができる。そういう考えです。パウロは、そのような考えについて、コロサイ教会の人たちに向けて、はっきりと言います。どうか巧みな議論にだまされないでほしい。あなたがたが救い主として信じるようになったイエス・キリストからあなたがたの目を離してはいけない。主イエス・キリスト、この御方のうちには、知恵と知識の宝のすべてがある。それが、まだすべての人々に現わされてはいない。隠されているだけだ、と。

御子イエス・キリストにおいて、この御方の十字架と復活において、神は、私たち人間の知恵と知識をはるかに超えることをなさいました。けれども、そうやって神が用意された、私たちの知恵や知識を超えた救いは、私たちの手の届かない遠いところにあるのかというと、そうではありません。修行をして、修練をして、その救いに何とか到達できるというような、海のかなたにあるようなものじゃない。むしろ、御子イエス・キリストがこの世に来てくださった。神御自身の方から私たち人間に近づいてきてくださった。救いをもたらしてくださるために、近づいてきてくださったのです。それが、御子イエス・キリストにおいてなされた十字架と復活の御業、私たち人間に救いをもたらす神の御業です。

「知恵と知識の宝はすべて、キリストの内に隠れています」。イエス・キリスト、この御方の内に、私たちを生かす無尽蔵の宝がある。その宝を共に見出しながら、それに生かされ、歩んでいく。そこに、将来へと向かって続いていく、私たちの信仰の旅路があります。